朝日 歌壇 俳壇

永田和宏選

パペットのウサギがひょっこり耳を出し異動の保育士荷物が揺れる（長岡京市）深沢　悦子

☆このかみがだれかのウィッグになるんだと三年のばしたかみ切りおえる（成田市）かとうゆみ

人間の形に白き布巻かれ遺体がガザの瓦礫に並ぶ　（観音寺市）篠原　俊則

ウクライナの攻撃やめぬプーチンがテロの死者には十字切りをり　（浜松市）松井　惠

並び立つ風車の丘の風の中君と頬ばった鮭のおにぎり　（京都市）中尾　素子

舞鶴の入江に育ちし牡蠣殻を貝灰にして花壇にちらす　（舞鶴市）新谷　洋子

寄す波は海より優し引く波はなほなほ優し春の琵琶湖よ　（加古川市）冨家　新子

恐竜の名前に必ず付く末尾「サウルス」の意は「蜥蜴」と知りぬ　（舞鶴市）吉富　憲治

もう二回ゴジラを観たという父を案外知らない知ってるようで　（富山市）松田　梨子

☆「お」と打てば「お世話になっております」と出てくるあわれ職場パソコン（西条市）村上　敏之

【評】深沢さん、ウサギのパペットがちょこんと耳を出しているのが、いかにも保育士の転勤。かとうさんは小学生だろうか。三年伸ばした髪が誰かの役に立つという喜び。篠原さん、白布が巻かれて却ってまざまざと人間の遺体を感じさせる。

馬場あき子選

夜の森のさくら映れば切なかり廃炉は遠く桜木は老ゆ　（下野市）若島　安子

壮年と老年の間ざりげなく「年配」という言葉があった　（大和郡山市）四方　護

春の暮亀も田螺も鳴いてゐるその声聞こゆる歌人俳人　（名古屋市）山守　美紀

☆「お」と打てば「お世話になっております」と出てくるあわれ職場パソコン（西条市）村上　敏之

店主泣き客も泣きつつ手を握る輪島の出張朝市の店　（観音寺市）篠原　俊則

父母なき子、子のなき父母の増えつづくガザに今宵も月まるく冴ゆ　（京都市）小池ひろみ

尊富士の優勝に沸く津軽人「けっぱった」と う訛りの熱さ　（仙台市）沼沢　修

薄氷を割って踏み込む苗代田拝むごとくに種籾をまく　（匝瑳市）椎名　昭雄

☆このかみがだれかのウィッグになるんだと三年のばしたかみ切りおえる（成田市）かとうゆみ

白線から落ちたらワニに食べられる小学生と信号わたる　（奈良市）山添　葵

【評】第一首「夜の森」は東日本大震災から復興途上の福島県の桜の名所。桜は美しく咲いたが廃炉は遠い現実だ。第二首の「年配」という表現は中年以上を指す。直接でない表現に配慮の面白さあり。第三首はさすが歌俳人の心耳。

佐佐木幸綱選

慎ましい暮らし晒して古民家が抗いながら壊されてゆく　（福岡県）末松　博明

自転車屋本屋仕出し屋文房具屋閉じた店見て歩くふるさと　（滋賀県）木村　泰崇

肋骨を折る気で押せと講師言う息子くらいの人形を指し　（東京都）富見井高志

遡る白波の立ち立ち止まぬ春の嵐の四万十河口　（四万十市）左山　遼

羊の子七十頭の生まれたり伊香保グリーン牧場の春　（前橋市）荻原　葉月

楽しみに来たれど霧の深ければ見えざる富士を見つつ飯くふ　（ひたちなか市）篠原　克彦

パイナップル生まれて初めて切っている長い旅路をねぎらいながら　（富山市）松田　わこ

プリンターが壊れて書類が出来ぬと言ふ三十年前手書きせし吾が　（町田市）村田　知子

咽頭を病んでも夫は同郷の尊富士関に声援をおくる　（盛岡市）山内　仁子

☆このかみがだれかのウィッグになるんだと三年のばしたかみ切りおえる（成田市）かとうゆみ

【評】第一首、「晒して」「抗いながら」に注目。古民家にあたかも思いがあるような表現。第二首、閉店した店だらけのふるさと。わざわざ四つ並べた表現的工夫。第三首、人工呼吸の実習のようだ。講師の発言を「え？」という思いで聞いている。

高野公彦選

島にきて初めて夫と共にする畑仕事と料理と散歩　（東京都）三輪　裕子

新人は三月経たずに腰痛め急募途切れぬ介護の現場　（酒田市）朝岡　剛

花の下にて西行のごと逝きし前登志夫の忌山桜咲く　（水戸市）中原千絵子

裏金の議員の処分を急ぎおり真相を闇に葬らんとし　（観音寺市）篠原　俊則

される人する人共に今詠みぬ万葉になしとふ介護の歌を　（名古屋市）磯前　睦子

野球ではファールフライを「邪飛」と書くオスプレイの飛行も邪飛と言うべし　（青森県）中村　範彦

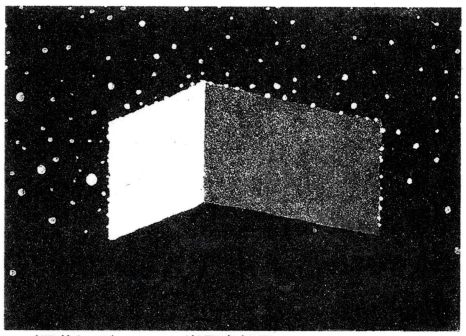
大宰府の梅は楷書の、長谷寺のしだれ桜は草書の薫り　（箕面市）大野美恵子

陽光の燦々そそぐ獄庭に鳩のカップルが交わす口づけ　（アメリカ）郷　隼人

投函のカタンという音　励ましになれどして みんネット投稿　（名古屋市）百々　奈美

左きき用のグローブはめてみた校庭に出て「野球しようぜ」　（奈良市）山添　聡介

【評】一首目、作者の住所は三宅島。移住して新しい生活を楽しんでいるのだろう。二首目、肉体的負担が大きくてしばしば体を痛め、現場を離れる介護職が多いので、〈介護職急募〉は途切れることがない。十首目、大谷翔平寄付のグローブか。



〈四谷にて〉　岩尾恵都子

俳句時評　蛇笏賞「澤」の配列

岸本　尚毅

俳句は一句一句が個々に独立した作品だ。個々の句を集めた句集は、こんどは句集という形で一個の作品となり、鑑賞や評価の対象となる。俳人は句集に収録する句の取捨選択に腐心するが、それに加え、本来バラバラの作品であった個々の俳句をどう並べれば面白くなるかを考える。句の配列は句集の魅力を左右するのである。

今回、蛇笏賞（前年刊の個人句集を対象とする最も権威ある賞）に決まった小澤實の「澤」は、まさに句の配列の妙を感じさせる句集だった。たとえば〈みづうみのあらなみに秋惜しむなり〉に〈琵琶湖上大風吹きぬ神の留守〉が続く。一句目は「みづうみ」「あらなみ」という和語を生かし秋を惜しむ。二句目は「神の留守」（各地の神々が出雲に出かけて不在の時期）の琵琶湖に大風が吹く。仮名中心の一句目と漢字中心の二句目の字面の変化が楽しい。「みづうみ」と「琵琶湖」そして「あらなみ」と「大風」が響き合う。「秋惜しむ」から初冬の「神の留守」へと心地よく季節が移る。二句を並べ読むことで、読者は琵琶湖の風景を重層的に味わうことができる。

あるいは〈汗の腕置いて机や密着す〉に〈雲の峰かがやきてあり雲の奥〉が続く。汗の腕と机が密着するわびしげな夏から一転して雲の輝く壮麗な夏へ。その鮮やかな場面転換が読者を楽しませる。

隣り合う句と句の変化を楽しむ文芸といえば連句。芭蕉はその達人だった。芭蕉に精通した小澤の句集において、句の配列に連句的なセンスが感じられたとしても不思議はないのである。（俳人）

◇5月5日の歌壇俳壇面は休載します。

風信

大辻隆弘歌集「椽と石垣」　第10歌集。「鈍よりも濃き椽のいろの夜がわが窓のかたはらにおぼめく」（砂子屋書房・3300円）

渡英子歌集「しづかな街」　第5歌集。「レプリカの壁画への道に冬陽差しゲルニカは静か、しづかな街だ」（本阿弥書店・3080円）

☆は共選作。入選作はデジタル版にも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。歌壇はネットでも投稿できま